

21J-am11

Pill Questionnaire を用いたパーキンソン病患者の認知機能調査

○彼杵 隆¹, 松岡 美智子¹, 吉見 智子¹, 奥田 若奈¹, 岸本 美奈子¹, 荒木 理保¹, 磯貝 誠子¹, 井口 さゆり¹, 浅野 和徳², 兼田 緑² (1クオール薬局飾磨店, 2クオール株式会社 近畿第四事業部)

【目的】超高齢社会を数年後に控え、認知症患者が今後急増することは言うまでもなく、早期発見が重要である。また一般的にパーキンソン病患者の 20-80%で認知症を併発している (Aarsland D et al Arch Neuro 2003;60:387-82) とされている。当薬局ではパーキンソン病患者が多いことから、パーキンソン病患者の認知機能低下にいち早く気づき、医薬連携を図る手段はないかと模索した結果、Pill Questionnaire に着目した。

【方法】2017年5-7月の期間、パーキンソン病薬を服用している患者35名に対し、服薬ケア時に薬の種類(色や形、mg数)、投与薬の数、投与期間(どれぐらい前から服用しているか、服用のタイミング)を確認する。これらに対し、患者自身ははっきりと評価項目を応えることができる場合1点、介護者の助け有で答えられ、服薬が安全かつ信頼出来るものである場合2点、介護者の助け有で答えられ、服薬が安全かつ信頼出来るものでない場合3点、患者が薬の事を説明者の助言があっても答えられない場合を4点、と服薬ケア時にアンケートを採り評価した。

【結果】アンケートを採った患者の中で、一包化患者群と、非一包化患者群を比較した。前者で3.33点、後者で1.36点と、一包化患者群で有意に高かった。また認知症薬服用有患者群と認知症薬服用無患者群で比較検討した結果、前者で3点、後者で1.64点と認知症薬服用有患者群が有意に高かった。

【考察】認知症薬服用有患者群が有意に高かったことから、Pill Questionnaire が薬局の服薬ケア時でも有用であるという事がわかった。今まで行ってきたことの延長で行うことができる。認知症の早期発見に繋げられるため、今後の医薬連携をより良いものに変えられる可能性が示唆される。